

23 セミナー初参加の感想

カンバーランド長老教会さがみ野教会 伊能悠貴
さがみ野教会で研修中 説教塾・セミナー：初参加

説教塾セミナーに参加して：全体の印象

初めての説教塾でした。加藤常昭先生とお会いすることも初めてでした。私は今年（2105年）の3月に神学校を卒業しましたが、まだ研修の身としてさがみ野教会で学びをさせていただいております。宮井岳彦先生のお誘いにより、今回のセミナーに参加させていただいた次第です。普段の研修では、月に一度の説教の奉仕をさせていただき、宮井先生より指導を受けております。その中で「説教塾は説教者を成長させる場所だ」とおっしゃられていたことを、肌身をもって経験することができました。

全体の印象を言い表すのであれば、「加藤先生は目指す場所を常に示し、セミナーに参加した者はそこに行くことを願う姿勢で取り組んでいた」と私は表現いたします。加藤先生と直接お話をすることがありまして、その中でこのような質問をさせていただきました。「聖書テキストの解釈は多様性があります。（たとえば今回のテキスト、マタイ 9:9-13 では、徴税人の名前がレビではなくマタイに変わっている。これは、マタイという人が重要なのではなく、誰でも招かれうることを言わんとしている、と解釈できる。）ですが、その解釈の力量は説教者に委ねられているのでしょうか？」と。それに加藤先生は「そうです。説教とは説教者の信仰告白のようなものです。」とお答えくださいました。まさにその視点で説教批評が行われていたと思います。

説教批評ですが、そこで説教者が問われていたことは、その説教の長所・短所はもとより、それを超えてその信仰者の信仰のあり方でありました。その説教者が、その教会で直面するさまざまな事柄に、聖書の言葉に、どのように取り組んでいるのか。それが問われているようでした。まるで見透かすかのように加藤先生の批評は、その説教者の実存を問うものだったと私には見えました。

説教を批評する者も、これまた簡単ではありません。「説教を聞く」ということが、そういうレベルで求められていたように思います。初参加の私は7回の説教批評を繰り返しながら、自分が聞くことができている領域の狭さを痛感させられました。

初参加ではありましたが、非常に得るものが多かった貴重な時間でありました。説教者は耳に痛いことでも、もしそれが真実であるならば聞き続けなければなりません。説教者が自分の信仰の状態を指摘される、そのような聞くのに苦しいとも言える言葉を、それでもなお聞く。そこに真の信仰の成長があるのでしょう。すばらしい時に参与させてくださったことに感謝をしております。